

# 聴覚障害小学生を対象とした手話言語習得支援

～手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクトにおける実践活動「もあこめ」～

○久保沢寛

河崎佳子

(特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構)

(神戸大学大学院)

KEY WORDS: 聴覚障害・小学生・手話言語習得

## 1. 目的

小学生を対象とする手話言語習得支援事業「もあこめ」(2020 年 6 月開始)について、立ち上げの背景と目的、初年度の活動について報告する。

## 2. 手話言語習得支援「もあこめ」企画の背景

2017 年度より大阪府手話言語条例(第三条 乳幼児期からの手話習得の機会の確保)の施策として、未就学(0～6 歳)の聴覚障害児とその家族を主な対象に、乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」が開始された(河崎他 2018)。本発表で報告する「もあこめ(MORE こめっこ)」は、2020 年度に始まった「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」(日本財団助成事業)にかかる実践の場として新たに企画された活動である。「こめっこ」を卒業した小学生を主な対象に、より高度な手話言語(日本手話)、つまり「二次的ことば」(岡本 1985)としての手話言語習得を支援することが、「もあこめ」の役割である。乳幼児期に手話言語を獲得した子どもたちが、継続して手話言語に触れ、思考し、組み立て、伝える力を身につけていく環境作りを目指している。

## 3. 研究プロジェクトにおける「もあこめ」の位置づけ

上述の「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」は、聴覚障害児の真の言語力を適正に評価するための実証的研究を行うことを目標に、脳科学、言語獲得(手話・日本語)、心理発達(人格形成)、学習能力(思考力)の 4 分野からアプローチするものである(河崎他 2021)。「もあこめ」の開始により、乳幼児期から児童期までの手話言語獲得・習得を一貫して支援し、実験、検査、観察等によって、そこで育つ子どもの力に関するデータの蓄積が可能となった。「もあこめ」では、日本手話力と日本語力の発達と相互の関係を明らかにするため、参加児童に対し、毎年 1 回、日本手話と日本語の文法、語彙、コミュニケーション力に関する検査を実施している。

## 4. 「もあこめ」の活動について

＜活動の目的＞ ①手話で遊び、手話で語り合う ②手話で学び、手話を学ぶ ③知識を広げ、思考力を磨く

＜支援の対象・頻度・スタッフ等＞ 「こめっこ」を卒業した聴覚障害小学生(聴覚障害児のきょうだいを含む)を対象に、初年度は月 4 回実施。スタッフはろうスタッフ、手話のできる健聴スタッフ、臨床心理士。活動をリードするのはろうスタッフ(native signer)で、プレイフルな場となることを心がけながら、日本手話の習得につながる支援を行っている。

＜活動の内容＞ 日本手話をよみ取る力を育てるために、「こめっこ」から生まれたオリジナル手話表現あそび(手話ばんばん:手話言語のプロソディが詰まった作品)、日本手話での「絵本よみ」や「劇」を取り入れて、手話独自の文法、表現、リズムに触れることを重視し、クイズやゲームを介してろうスタッフの手話説明をよみ取り、理解する力を養う。さらに、「きゅっとものがたり:物語の小粋な手話要約作品」で、より洗練された手話習得を促す。日本手話で伝える力については、あそびの中で、ろうスタッフや他

児と会話し、話し合う体験をする。こうした活動をとおして、知識を広げ、思考する力を培う。

## 5. 初年度(2020 年 6 月～2021 年 3 月)の活動について

コロナ禍による一度目の緊急事態宣言解除直後の活動開始で、オンライン開催を組み込んだ初年度となった。

＜参加状況＞ 2020 年度の実施回数は全部で 18 回、その内 14 回は対面、4 回はオンラインで実施した。毎回の参加人数は、平均 4.5 名(1 名～7 名)で、参加した聴覚障害児は合計 14 名(参加回数は 1 回～11 回、学年は 1 年生 2 名、2 年生 12 名)、健聴きょうだい児は 2 名(参加回数は、3 回と 1 回)だった。また、聴覚障害のある参加児の所属は、聴覚支援学校が 3 名、難聴学級が 6 名、通常学級が 5 名であり、その内、日常的に日本手話に触れている子どもは、皆無であった。なお、現在の「もあこめ」参加児のほとんどは、5 歳以降に「こめっこ」に参加して日本手話を知った子どもたちで、第一言語は日本語(口話)である。

＜活動について＞ 絵本よみの際は、まず絵を見てイメージした後に、手話のよみ取りに集中する時間を作っている。あそびの中では、興味をひくゲームやクイズを工夫し、ルールや問題の理解について、会話をとおして確認すると共に、クイズの回答をめぐる質疑や話し合いを展開するなど、手話で伝える体験を促し、好奇心、探究心を高めながら、人とのかかわる力を育んでいる。

＜オンライン活動における工夫＞ オンライン活動においても、基本的に対面と同じ内容を実施した。工夫としては、活動内容に合わせて画面のレイアウトを変えている。「絵本よみ」や「手話劇」など、手話表現をよみ取ることが中心となる活動の場合、絵本をよむスタッフの映像や手話劇映像のみがモニターに映るように固定して、子どもたちが集中できる環境にしている。一方、話し合いやクイズなど、伝え合うことが必要な活動では、全員の顔を見ることが出来るレイアウトにしている。

オンラインにおける絵本よみや説明の際、対面であれば立体的に表現できる部分が平面的になってしまう。そのため、表現する際の角度に配慮したり、高さ、幅、奥行きが重要となる表現を正確に伝えるため、体を前後左右上下に動かして画面に映る範囲を調整したりしている。

## 6. 初年度の振り返りと展望

「絵本よみ」「手話劇」の内容に集中し、その表現を正確に真似ることが増え、当初にくらべ、日本手話をよみ取る力が向上している。一方で、日本手話で伝える力は、まだ単語レベルに止まり、自由に語れる段階には達していない。

2 年目となる 2021 年度は、月 8 回開催とし、活動の充実を図ることで、粘り強く手話言語習得を支援していきたい。

### ＜文献＞

河崎・物井・久保沢(2018)「手話言語のあふれる早期支援(1)(2)」日本特殊教育学会第 56 回大会ポスター発表  
河崎・久保沢他(2021)「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」日本発達心理学会第 32 回大会自主シンポジウム

(KUBOSAWA Yutaka, KAWASAKI Yoshiko)